

辨榮聖者
光明大系

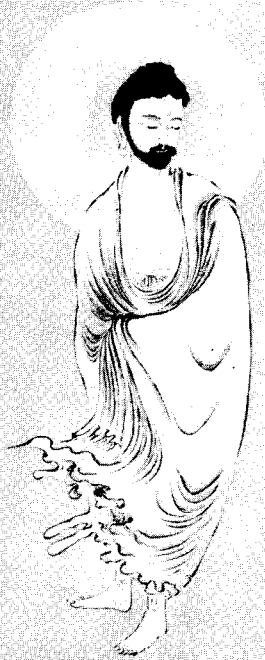
無邊光

講談社版



辨榮聖者像（60歳，1918年秋）

白依比叔况可乎
子以天伽那乃聖王仁
阿耨多羅三藐三菩提美



印
在
佛
殿
未
及
之
此
佛
比
淨
莊
嚴

出山釋迦如來像（辨榮聖者筆）

まえがき——無辺光と人類

岡 潔

1

今大抵の日本人は自然科学を神のように思っている。しかし、どうもいろいろ疑わしい節がある。一度よく調べてみよう。

大体自然科学者は、自然とは何かは自明だとして、それについては少しも言明していないが、自然とはどういうものかと思ひ込んでいたのである。彼らに代わってそれを口に出していることから始めよう。

始めに時間空間というものがある。画を描く時、始めに画用紙があるようなものである。

こう思っているのだが、時間空間とは何であろう。空間はまだよいが時間については、人は時間の

中に住んでいるのではなく、時の中に住んでいるのである。時には現在、過去、未来の別がある。未来はわからない。希望も持てるし不安も懐かざるをえない。現在はすべてがわかつていてすべてが動かせない。過去は一切が記憶としか思えない。それもだんだん薄れて遠ざかって行く。時間とはこの過去の時は過ぎ行くという一屬性を觀念化したものである。時については他にもいろいろ考えられるが、道元禪師の『正法眼蔵』に譲る。

さて自然科学者であるが、その次どう思っているだろう。

時間空間の中に物質というものがある。物質とは、途中は、たとえば望遠鏡で見るとか、赤外線写真に撮るとか、いろいろ工夫を凝らしてもよいが、最後は肉体に備わった五感でわかるものである。どうしても五感でわからないものは無いのである。

この五感でわからないものは無いのだということは、自明だとして疑ってもいないのだが、それは原始人と余り変わらないという感じを受ける。釈尊は「仏道の修行は五感を閉じてせよ」と教えたのである。先へ進もう。

この物質が自然を作っている。その一部分が自分の肉体である。時間空間の中に物質があるといったが、これは空間の中に物質があつてそれが時間とともに変化するという意味である。物質が変化す

れば働きの出る。肉体とその機能とが自分である。

自然科学者はこう思っているのである。これは自然そのものではなくて、自然のごく簡単な一つの模型である。この模型を物質的自然ということにしよう。

自然の簡単な模型を作つてその中をよく調べようというのは、確かに一つの方法である。しかし模型がこんなに簡単では生命現象はわかるのだろうかという疑いが起こる。それで一つ問うてみよう。

人は生きている。だから見ようと思えば見える。見ようと思えば見えるのは何故であるか。果たして自然科学はこれに対して一言も答えることができない。

立とうと思えば立てる。この時全身四百いくつの筋肉が瞬間に統一的に働くのであるが、どうしてこういうことができるのか。自然科学はこれに対しても一言も答えられない。人の知覚運動について何一つ説明できないのである。

物質現象については充分よくわかっているのだろうか。一つ聞いてみよう。

物質が各々の法則を守つて決して背かないのは何故であるか。自然科学はこれに対しても少しも説明しようとするまい。

かように物質的自然の中を調べてわかるものは、物質現象の一部分に止まるのである。

物質現象の一部分しかわからないというのでは全くの無知と余り変わらない。仏教ならば生命現象について教えてくれそうである。それで一度仏教に問うてみよう。

一体何がどうなっているのですか。

仏教はこう教えてくれる。

仏教では心を層に分けて説明する。その最奥底を第九識と数える。

始めに第九識というものがある。これは一面唯一つであって、他面一人一人個々別々である。第九識にはこの関係以外何もない。時間もなく空間もなく自他の別もない。

第九識を一人一人個々別々であるという方面から見た時、これを個と呼ぶ。この個が個人の中核である。個の量は無量である。(この個は一面一つであって他面二つということに必然なるから、個の数とはいえない。それで個の量というのである)

以下各個についていう。

第九識に依存して第八識がある。ここには一切の時がある。しかし他には何もない。

第八識に依存して第七識がある。ここに到って始めて大小遠近彼此の別がある。彼此の別とは自他の別である。

この第八識と第七識との区分法は私が少し変えたのである。しかしこれは単に言葉を変えたに過ぎない。

この第七識をいわば軸として、そのまわりに肉がついて、自然があり、人々があり、その一人として自分がある。第七識を軸としてというのは、第九識を軸として第八識があり、第八識を軸として第七識がある。その第七識を軸としてという意味である。

仏教はこういつているのである。それでは人は何故知覚運動ができるのかと聞くと、仏教はこう答える。

人の普通経験する知力は理性のような型のものである。意識下においてしか働かないし、そのわかり方は少しずつ順々にしかわかって行かない。しかし時として、たとえば仏道の修行の時にはこれと型の違った知力の働いていることがわかる。どういう知力かというとき、無意識裡に働いて一時にパツとわかる。こんなふうな知力だから余程強く働く時でないときつかないのである。これを無差別智だいにんきょうちといふ。知力といえは知情意に働く力という意味である。無差別智には四種類ある。大円鏡智びやうどう、平等

性智しやうち、妙觀察智みょうくわんざち、成所作智じやうしよさちがこれである。

さて、見ようとすれば見えるのは、この四種の無差別智のすべてが第九識に働くためである。立とうとすれば立てるのは妙觀察智が第九識に働くためである。人が知覚し運動することができるのは、すべて無差別智が第九識に働くためである。

明快な答えである。しかし、もう少し聞いておこう。無差別智は何に起因するのですか。そうすると仏教はこう答える。

第九識をその唯一つという方向から見たとき、これを如来という。丁寧にいえば唯一絶対の如来、名をいえば無量光寿の如来。如来と個との関係を不二不二という。無差別智は如来の光明である。これを無辺光という。

それだったら人の肉体はまるで無差別智の大海の中の操り人形のようなものである。そうすると人実際にその中に住んでいる自然は、単に目に見える部分だけではなく、目には見えないが、無差別智の常に働いているような場所でないならぬ。

ところで、無差別智というのは個の世界の現象である。その個の世界は、二つの個の関係が一面一つ他面二つというようなものである。だから個は数学の使えない世界である。これに反して物質的自

然は数学の使える世界である。だから無差別智は物質的自然には働かえない。だから人は物質的自然の中に住んでいるのではない。

仏教のいうところをもう少し聞こう。

真の自分は個である。これを真我という。しかし人は普通五尺のからだを自分だと思い込んでいる。これを小我という。小我は迷いである。人はこの迷いを離れて真我を自分だと悟らなければいけない。

真我を自分だと悟るとどういふよいことがあるのですかと聞くと、仏教はこう答える。

時間の中に真我があるのではなく、真我の中に時間があるのである。だから人は不死である。西郷隆盛は、大丈夫であるための条件をいろいろ挙げてゐる。そのうち始めの二つが特に大切である。

「命もいらず、名もいらず」

しかし実際にそのとおりに行為することは、不死の自覚がなければ容易ではない。

今一つある。空間の中に真我があるのではなく真我の中に空間があるのだから、真我は空間的にも限りなく拡がっている。その拡がり方はどうかというと、普通人が自分と知っているものは真我の自分である。普通人が他ひとと思つてゐるものは真我の非自非他である。他には主宰性もあれば個性もあ

る。だから他は自分ではない。しかし他の喜びは自分の喜びであり、他の悲しみは自分の悲しみである。だから他は他ではない。普通、自然と思つているものも真我の非自非他である。真我の人は自然を人倫でないとは思わない。その人倫としての自然のあり方は、前にいった意味において非自非他であるというのである。

こんなふうだから、何よりも、真我の人にとっては他の喜びは自分の喜びであり、他の悲しみは自分の悲しみである。これは観音菩薩の心である。

3

かように仏教のいうところを信じると一応すべて説明がつく。しかし仏教はどの程度にまで信じられるものだろうか。こういう問題が出て来る。

やがてこういうことになるのがわかっているから、私は仏教の所説として、唯一人の人山崎弁栄上人のいうところを紹介したのである。もっともこの人独自の説は、唯一絶対の如来があつて、その光明が無差別智であるというところだけであつて、他は仏教の通説である。

何故この人を選んだかという、釈尊は時代が遠くて御伝記がよくわからない上に、今日伝えられ

ているところのうち、実際どれだけの部分をどういふ言葉でいわれたのかよくわからない。

ところが山崎弁栄上人は、私たちよく知る者にとっては、釈尊の再来としか思えない方であって、年代がごく新しく、明治の少し前に生まれて、大正九年に亡くなった方だから、御伝記もよくわかっているし、数々の御著述も残っている。それで信じるとは何を信じることがよくわかる。幸いこういふ人がいたから、この人を選んで、そのいうところを書いたのである。

弁栄上人は青年のころ浄土門に入って独自の方法で修行し、僅か四年足らずで仏眼了々と開いて見仏した。この四年足らずという時間は史上最短であって、釈尊は五年かかっているし（八年という人もある）、法然上人にいたっては二十数年かかっている。その後一切経を読破し、浄土宗を出て新たに「光明主義」という一宗を起こした。光明主義に関して数多い御著述がある。前に述べたことはこの御著述から抜いたのである。

その人をよく見よう。田中木又先生著の御伝記『弁栄上人伝』がある。それを読んで一番驚くことは一点の私心もないことである。尋常一様の私心のなさではない。人のからだの数多くの細胞が仮に一つの人体を作っているのは、普通は私心が結び合わせているのである。弁栄上人の御生涯を見て、人がこうまで私心を抜いてよく生きて行けたものだと思つて驚く。

次には数々の奇蹟を行なっていることが目につく。力量非凡である。御伝記にあるものだけでも、充分奇蹟を愛する人の心を満喫させてくれる。御伝記にないものから、二つだけ選んでお話ししよう。

弁栄上人はある時期には暇があると自然科学の本を読んでおられた。自然科学者は早まっつうぬぼれてはいけない。自然科学というのは真智の人にとっては、突拍子もない思想であろう。この住民の奇抜な習性を知らなければ、どんなふうに度生するのがよいのかわからない。それで読んでおられたのである。

そういう時期に、ある光明主義の信者が、上人に自然科学全書といったふうな内容の本を差し上げた。部厚な本である。そうすると上人は、その本を左の手で持って、その腹の所に右の親指を当てて、ページとページを弾かれた。その人がわけを聞くと、上人は、「ハイ、これでわかりました」といわれた。余りの不思議さに、その人は上人の許しを得て、二、三カ所聞いてみると、皆すらすら答えられた。これは大円鏡智の働きである。

弁栄上人が群馬県の高崎に御巡錫しておられた時、そこから三十里程隔たった新潟県の柏崎でこういうことが起こった。寺の奥さん、籠島咲子さんといわれるのだが、その方は光明主義に帰依していたのだが、修行がうまく行かないので自殺しようとしたのである。これはちょっとできないことだと

思う。如来さまのお告げでこれを知った上人は、身を二つに分かつて、一半を高崎に置いてさりげなく談笑し、一半は柏崎へ行こうと思うともう行っていた。それでちょうど寝ていた咲子さんの枕辺に立って、「仏憶いの光明を、胸に仏を種とせよ」と七遍繰り返して行って、そのまま帰って来た。この身を二つに分かつのも、行こうと思えばもうそこへ行っていいのも、共に妙觀察智の働きである。

私は弁栄上人のいうところを、そのまま信じようとは思わない。自分の目で見ようと思ってもう始めていたのである。しかし、そのためには修行して目がよく見えるようにしなければならぬ。それにどれくらい時間がかかるかということであるが、弁栄上人は人が発心して修行を始めてから仏になるまでにどれくらい時間がかかるかというところ、単細胞生物として始めて地表に現われてから人になるまでに要した時間の二倍かかるといわれた。ところで弁栄上人を見ると釈尊と余り違わない。そうするとこの修行に四十億年かかるということになる。これは地表が冷えすぎてもう住めなくなるまでの時間の長さと同パラタイプである。

こんなふうだから確かめるまでの間は信じているより仕方がないのである。幸い上人の御人格といふ御力量といい、この人のいうことは疑うほうがむしろかしいのである。

学問も本当は信じるのであろう。仏教もこの辺までならば学問である。ただ信じ易さが違うだけで

ある。

4

第九識、第八識、第七識は、人体についていえば、どこになるのだろう。

これについて弁栄上人はこういつている。頭頂葉は靈性の座、前頭葉は理性の座。靈性というのは第九識のことである。

大脳生理はこういつている。頭頂葉は受け入れ態勢のよって来る所である。前頭葉は感情、意欲、創造を司る。

この二つから第九識は頭頂葉と断定してよいと思う。

ところで、大脳生理学のいうところを聞いて非常に疑問に思うのは、創造が前頭葉で行なわれるだろうかということである。結果をいえばこれは思考と訂正すべきである。創造については後に述べる。

さて、問題は第八識、第七識の位置である。

過去なくして、突然現在に在る人というものはない。その人とはその人の過去のエキスの全体であ

る。

それだったら時がどのようにエキス化されて貯えられるのだろうか。

まず時という心の食物を咀嚼玩味する口はどこだろう。これは前頭葉にきまっている。このことは大脳生理学者は異存はないと思う。

咀嚼玩味してエキス化されると、時の内容はどう変わるのだろうか。これは非常にむずかしい問題である。しかし人は皆常に経験しているのであるから自分でよく考えてみて欲しい。結論をいえば大遠近彼此の別がとれるのである。これはいわばかすである。哲学の西田先生にこういう意味の言葉がある。

「言葉でいい表わすとか、すのような気がする」

創造の仕事にたずさわっている人は、先生のこの言葉を実感として受け取るであろう。大小遠近彼此の別を入れなければ色彩が出ないから言葉にならないのであるが、いったんそうすると、いわば天上に実った創造の地上に落とした影のようなものになってしまうのである。

エキス化した心の食物をどこへ貯えるのであろうか。これは頭頂葉にある。受け入れ態勢のよって来る所は頭頂葉だといっているのだから、これは大脳生理学者にも多分異存がなからう。

これで答えが出た。第八識は頭頂葉、第七識は前頭葉である。

5

胡蘭成さんという中国人がある。もう二十年以上も日本にいたのであるが、近頃日本語で『建国新書』という本を書いた（中部日本新聞東京本社発行）。その中でこういつている。人の知の領域は三層に分かつことができる。顕在識、潜在識、悟り識。

今日学校で教えている智はすべて顕在識である。

とうもろこしは台風を予知する。午後には台風が襲来するという日には、午前中から背を曲げて丈を低くし、葉は皆巻いて待機の姿勢でいる。こういう不思議な知力が人にもいろいろ働く。これが潜在識である。

悟り識が開けなければ、その民族の文明は真の文明にはならない。

日本民族と漢民族とはもと同一民族であった。だから親近感が非常に深い。この日漢民族には古くから悟り識が開けている。しかし欧米人には一向これが開けない。こう書いている。

実際、たとえばソビエトは金星ヘロケットを打ち込むことができるのに、そのチェコに対する仕打

ちを見れば、力の強い国は何をしてもよいとしか思っていない。それでは野獸から一步も出ていないのであるが、こんなわかりきったことがわからない。ちょっと不思議に思うのであるが、これが悟り識が開けていないということである。

人は不死だし、時のエキスは死んだくらいではなくならないから、人の心は造化の手でだんだん美しく染めなされて行く。これが第八識である。

日本人は董すゑを見ればゆかしいし、秋風を聞けばもの悲しい。別に教えられてそうなるのではない。芭蕉は、

秋風はものいはぬ子も涙にて

といっている。これは心の中の自然の中にいるから、こう見え、こう聞こえるのであって、じかに物質的自然の中にいたら、こんなことになるはずがない。

これは日本人は皆そうだが、人は皆そうだというのではない。適当な例がないから仕方がなく欧米人を採るが、欧米人は董すゑを見てもゆかしいとは思わないし、秋風を聞いてももの悲しいと思わないにきまっていると思う。大体もの悲しいという言葉の意味を教えることが非常に困難であろう。この悲

しいは喜怒哀楽の悲しいとは質的に違っている。喜怒哀楽の悲しいは前頭葉の悲しみ、もの悲しいは頭頂葉の悲しみである。

だから日本人は日本民族固有の心の中にいるのである。ちょうど春の野に堇もあれば蓮華れんげもあるようなものである。日本民族の心は花なら堇の花なのである。ただ花なのではない。

堇は一朝一夕に堇になったものではないにきまっている。日本民族が今日の心の色どりを持つまでにはどれくらいかかったのだろう。中国の伝説には時代の長さが書いてあるから、私は胡蘭成さんに頼んで計算してもらったのであるが、日漢民族の起源は今から三十万年前である。

かような日本民族の心のありかが、人体でいえば頭頂葉の第八識である。

私はある日、目は覚めたのだが起きないで、私の部屋の寢床で枕に脇わきをついて、心のことを心に委せていた。ちょうどその日私の家に泊った胡さんが、庭を歩いていて、窓の外からそれを見た。そして私にこういった。「あなたがしていたのが瞑想であって、それが黄老の道である。今日日のあたり見せてもらって、大変尊い教えを戴きました」。頭頂葉のことを黄老では泥洹宮ないおんという。

泥洹とは有無を離れた境という意味である。私は私の平生のやり方が黄老の道だと聞いて実に意外だった。しかし考えてみればそれは当然であって、日漢民族は僅々数万年前に分かれただけだと思う

から、時のエキスの集積は大体同じなのである。

日本民族は泥涸界に住んでいるのである。

なお心のことを心に委せているのを瞑想するというのである。積尊の主武器は瞑想だったと思う。日本民族の住んでいる世界は第八識であるが、その風光がよくわかるのは、第九識の無差別智の光が照らしているからである。どんなふうな照らし方をしているかが知りたければ、無差別智についてよく知らなければならぬ。

6

創造についてお話ししよう。

一九一二年に死んだフランスの大数学者にアンリー・ポアンカレという人がいる。この人の書いた『科学と方法』（岩波文庫）という本の一章に「数学上の発見」というのがある。ポアンカレはここで自分の数多くの発見の有様を詳細に述べて、その後でこういつている。

数学上の発見の時働く知力は三つの特徴をそなえている。第一に、一時にパツとわかる。第二に理性的努力なくしては発見は起こらないが、時間的にいって努力の直後に発見が起こったことはない。

いつも大分たつてからである。第三に結果は大抵理性が予想したのとは違っている。こんなふうなのだが、いかにも不思議な知力だが、これは何であろう。

当時フランスの心理学会がこれを読んだ。そして、これは西洋文化の核心に触れた問題だと思ったのだろう、すぐにこれを取り上げて、当時の世界の大数学者たちに、あなたの数学上の発見の時の有様はどんなふうですか、と問い合わせた。答えは大体ポアンカレと同じだったという。

これで問題は確立したわけだが、この問題が一步でも解決に近づいたという便りを私は聞かない。答えは簡単である。これは無差別智の働きである。

ところで、無差別智の働きによって創造しているところまではポアンカレも私も同じなのであるが、無差別智の働き方が違う。ポアンカレに対しては潜在識として働いているのであるし、私に対しては悟り識として働いているのである。そういうことがどうしてわかるかというと、数学上の発見は、ポアンカレが述べた三つ以外に、さらに二つの大きな特徴を持っているのであるが、ポアンカレは少しもそのことを述べていないからである。その一つは数学上の発見は必ず「発見の鋭い喜び」を伴うことである。発見の鋭い喜びというのは寺田先生の言葉である。

発見の鋭い喜びの一番よい例はアルキメデスの場合であつて、二千年を経てみても、その歓天喜地

する有様が目に見えるようである。私がこういうと、胡さんは大変喜んで、念のためアメリカ人の書いたアルキメデス伝を読んでみると、他のことは皆詳しく書いてあるのに、発見の鋭い喜びのことだけは少しも書いてなかったということである。

今一つは少しも疑いを伴わないことである。私はこれが一番大きな特徴ではないかと思っている。これが何よりも創造は頭頂葉に実るものであって、前頭葉で行なわれるものではないことを示している。もし前頭葉に実るものならば、どんなに確かめても疑いは跡を絶たないのである。

一例をお話しよう。

私はある時一つの数学上の（ポアンカレがいうような型すなわちインスピレーション型の）発見をした。秋風が吹き始めた頃である。

これは大変重要な意味を持つように思ったから、そして本当にそうなるかという不安は少しもないから、私はその証明を書いて検討することは全くしないで、そこがそうだとわかると、その周辺の風光がどう変わるかのほうを先に調べた。これを論文に書いたのは、翌年の蛙鳴く頃である。だからその間九ヵ月である。

創造は頭頂葉に実るのである。これは二つの点で女性の妊娠に非常によく似ている。一つは創造が

実ると、実ったことを決して疑わないことである。今一つは書かなければ決して忘れないことである。書く時は頭頂葉に実った創造の影を前頭葉にうつして、それを紙に写すのである。西田先生はこの時のことをいっているのであろう。これをするとは分婉したようなもので、後三日もすれば跡形もなく忘れてしまふ。

これは真の創造であるが、善の創造はどうであらう。

もし善行の素が前頭葉に実るものとすれば、前頭葉が命令して運動領（頭頂葉と前頭葉との中間）が行為することになるから、自分が善行を行なう、になる。自分がという意識の伴うことを、禪では染汚なしているといつて非常に嫌う。つまり、けがれているといふのである。善行の素は頭頂葉に実るから、運動領は疑う所なく行為し、水の流れるように善行が行なわれるのである。

美の創造も見とおこう。日本における三大古典は古事記、万葉、芭蕉である。これらはいずれも文学であるが、その特徴は大小遠近彼此の別のないことである。すなわち美の創造も頭頂葉において行なわれるのである。

画も見とおこう。

東洋の画は頭頂葉で見ながら描くのであるが、西洋の画は前頭葉で見ながら描くらしい。その証拠

に西洋においては女性の裸体画が美の極致とされているらしいのだが、東洋の真面目な画にそんなものは一枚もない。

かように西洋人が美と呼んでいるものは、厳密な意味における美ではない。美とは悠久なものである。厳密にいうならば、美も頭頂葉によって創造されるのである。

創造は、真、善、美すべて、第九識、第八識がともに働くのである。

7

私は七年程前、その頃は奈良の女子大に勤めていたのであるが、どうも近頃の学生は自明なことほど却ってよくわからないらしいと思った。それで自明のわかる知力の光度を測ってみたのであるが、私のを一とすると二万七千分の一である。

この知力が平等性智である。

この二万七千分の一という暗さは、自分の中にどんな大きな矛盾があっても、他から指摘されなければわからないという暗さらしい。こんなふうだと今に指摘されてもわからなくなるのではないかと心配していたのであるが、また一段と暗くなったようであるから、大体測ってみるとさらに三十分の一

ぐらいになっているらしい。大体百万分の一である。そしてこの暗さは、はたして他から矛盾を指摘されてもわからないという暗さらしい。

大学生に話し合えないものが多いようだが、この暗さなのであろう。

日本の大学生だけではなく、人類全体がそうらしい。数学の論文に現われたところによってみると非常によくわかるのであるが、第一次大戦前、第一次大戦後、第二次大戦後と、平等性智は階段的に急速に暗くなっている。

人は文明は時の流れとともに進むものと独り決めに決めて少しも疑っていないらしいが、もし人の生活が本当の意味ではだんだん悪くなって行っているならば、だんだん野蛮になって行っているといつたほうが正しいであろう。これをだんだん文明が進むと思うのは少なくとも非常に危険である。

少し前アメリカでキーパンチャーのよく自殺することが大變問題になった。アメリカは何故かはわからなかったが、日に三時間以上働かせないとか、よい音楽を聞かせるとかいう人道的応急措置を取った。

私もその時何故であろうかと思つていろいろ考えたのであるが、その時はよくわからなかった。しかしその後だんだん大体はわかつてきたように思うのである。

人が生き甲斐を感じるのには頭頂葉において感じるのであって、キーパーチングのような仕事は側頭葉においてするのである。道は頭頂葉から前頭葉へ前頭葉から側頭葉へとついているのだから、この二つの場所は非常に隔たっているのである。だからキーパーチングのようなことばかりやっている、精神的生命力が涸渇するのではあるまいか。

そう思つて世の中を見ると、機械が人を使つたり、組織が人をおしつぶしたりすることが急速にふえてきている。このことは人に側頭葉的生活（機械的生活）を非常にしるにきまつている。そうすると人類の精神的生命力はだんだん稀薄になるだろう。近頃世界の大学生たちが騒いでいるようであるが、動物的敏感さによって生命の危険を予知するからではあるまいか。

私がいいたいのは、世の中がよくなったのか悪くなったのかがわからないということは、人類にとって水爆以上に危険であるが、これは平等性智の知力が強くなければわからないのだということである。

8

私は一九二五年に数学科を卒業して、一九二九年にフランスに留学した。ライフワークとすべき間

題を採し当てるためである。

問題は一年足らずで見つかった。私はこの問題は私には解けないかもしれないが、私に解けないものならばフランス人には解けないだろうと思った。何しろ第一着手が全くわからないのが特徴である。私はそのために、フランス文化に何か使えるようなものがなかるうかと思つて採したのであるが、在仏中には見当たらなかった。

むしろ芭蕉一門の不思議さが目に止まった。俳句は五七五という短詩形、今日非常によくよめたと思つても、明日はその反動で一層落胆するかもしれない。芭蕉にいわせると真によい句は生涯に二、三句だということであるが、こんな頼りないものの二、三句に生涯を懸けることは、まるで薄氷に全体重を托するようなものである。それなのに芭蕉一門はそれをやっているように見える。どうすればそんなことができるのだろう。

そう思ったから、日本へ帰つてから芭蕉の俳句や蕉門の連句を真剣に調べた。

そして芭蕉の句のよみ方がわかった。芭蕉は自分がそのものになることによつてそのものを見るのである。そしてこの目を身につけた。これが問題の解決に非常に役に立った。

その後私はこの目によつて教育を調べた。教育で見なければならぬのは、子供の心であつて子供

のからだではない。だからこれによってでなければ見えないのである。肉眼ではだめなのである。この目を妙観察智というのである。

9

日本人の住み家である泥洹界をよく見よう。

堇がゆかしいというのは一つの（不可抗力な）メロディー（絶対観念）である。秋風がもの悲しいというのも一つのメロディーである。泥洹界の風光は無数のメロディーからなっている。

この無数のメロディーが一つの世界を作っているのは大円鏡智の働きである。

泥洹界とは第八識の大円鏡智である。

10

『昆虫記』の著者ファーブルはこういつている。「私は人が死ねばどうなるのか知らない。しかし、もしもう一度人に生まれてくるものならば、また昆虫の生態を研究するだろう。しかし幾代続けて研究しても、昆虫の不思議な本能についてはついに全くわからないであろう」

これも無差別智の働きである。無差別智について知らなければ生物学は調べられないのである。

11

物質的自然の中を調べても物質現象の一部分しかわからない。学問、芸術、政治、経済、教育、宗教、すべて物質的自然界の外に道を求めなければならぬ。

しかし、物質的自然界を一步外に出れば、そこは無差別智の霧の大海である。だから無差別智についてよく知らなければ道はわからないのである。

その無差別智について最も権威ある本が、この山崎弁栄上人の著わされた『無辺光』である。(前にいったように、無辺光とは無差別智という意味である)

昭和四十四年二月下旬